障害の重い子どもの統合保育に関する事例的研究

滝本　南

Ⅰ　問題及び目的

障害の重い子どもとは、障害の状態が重度であったり、複数の障害を併せ有していたり、人工呼吸管理などの医療的ケアが日常的に必要な状態にある子どもを総称して用いられる言葉である。

障害の重い子どもたちについて、土谷（2006）は､情報の授受や処理の困難､できることの制限､コミュニケーションにおける発信の困難、周囲と共有する活動をもつことの困難さがあることを指摘している。

寺川（2010）は、保育所に入所する障害児の多様化､重度化､低年齢化を指摘している。しかし、これまでなされてきた障害の重い子どもの統合保育についての報告は、幼児の成長記録や保育技術の紹介、支援体制の構築の経過記録などにとどまっている。障害の重い子どもの統合保育における保育と支援の実際について明らかにすることは、これまで病院や施設が生活の場となることの多かった障害の重い子どもの幼児期の生活や教育について再考していく上で意義あることと考える。

そのため本研究では、これまで報告例の少ない障害の重い子どもの統合保育における保育と支援の実際について事例的に明らかにすることを目的とした。

Ⅱ　方法

１　対象

1) 対象児

B 幼稚園に在籍する男児２名(以下 C1,C2)。２名とも観察開始当時年少児クラス在籍。

C1 は、シンツェルギーディオン症候群の疑いがあり、視覚は光覚、聴覚は ABR 反応無し。未定頸、座位保持不可、明確な随意的反応は見られない。人工呼吸管理、吸引、経鼻経管栄養等の医療的ケアを必要とする。研究開始当時 4 歳 2 ヶ月であった。

C2 は、超低出生体重児。在胎週数 25 週、出生時の体重は 652g。高度難聴、痙直性両まひ、知的障害の診断を受けている。補聴器装用時の両耳聴力は 67.5dB。移動は寝返りや腹ばいで行う。手指の動きは、比較的微細な運動が可能。コミュニケーションにおける発信は簡単な手話的表現、指さしとそれに伴う発声で行われている。受信できるのは簡単な手話や身振り、指さし、耳元での発話である。研究開始当時 4 歳 3 ヶ月であった。

2) 対象園

A 県の私立 B 幼稚園。「自由な遊び」を中心とした教育を実践している。これまでに、ダウン症児、広汎性発達障害児、肢体不自由児、聴覚障害と心臓疾患の重複障害児、気管切開児等を受け入れてきている。また、診断はないものの障害の疑いのある幼児も複数在籍している。C1 の入園に際して看護師（N）を職員として新たに配置している。

２　資料収集の方法

20XX 年 2 月～20XX 年 7 月の期間、計 36 回、B 幼稚園において対象児の活動の様子の直接観察を実施した。また B 幼稚園の統合保育の概要、および保育の実際に関連する資料を収集するために、対象児の保護者、幼稚園園長、対象児の所属するクラスの担任教員、幼稚園での対象児の生活を中心となって支えている看護師 N への半構造化面接を実施した。

３　資料分析の方法

対象児の活動を直接観察し、観察結果を基にエピソードを作成した。作成したエピソードから、対象児の幼稚園での活動について、他児の対象児に対する関わりについて、支援者による対象児の

幼稚園での活動に対する関わりについてそれぞれの観点から分析を行った。

分析に際しては先行研究を参考に作成した分析カテゴリー用いることとした。参考とした先行研究は、対象児の幼稚園での活動ついては、奥山ら（1993）、他児の対象児に対する関わりについては、野田・田中（1993）、丸山（2009）、支援者による対象児の幼稚園での活動に対する関わりについては、土谷（2006）、三宅ら（1974）を用いることとした。

Ⅲ　結果及び考察

作成されたエピソード数は C1 が 13、C2 が 24 であった。

1　対象児の幼稚園での活動への関わりについて（表１）

対象児の幼稚園での活動の分析から、C1、C2 それぞれに異なる活動の様相が明らかになった。

自由に体を動かすことが難しい状態にある C1 の幼稚園での活動は、支援者の有無によってその内容が異なっていた。支援者がいない場面での C1 はベッドの上で孤立状態にあり、他児から働きかけられても受容するだけにとどまっている。しかし支援者といる場面では、支援者による身体的ガイドや代弁によって他児への接近行動や体を動かす保育活動への参加が可能になっていた。

ある程度自由に動くことができる C2 は、支援者の有無にかかわらず様々な行動レパートリーを持っていることが明らかになった。また、支援者の有無にかかわらず、周囲の大人や他児への移動による接近や、手伸ばしや声出しによる接近行動が複数回観察された。支援者が傍に居ない状態でもある程度移動が可能で、他者との簡単なやりとりも成立している状態にある C2 については、C2 自身の意思で動ける場面を保障していくことが C2 の活動の幅を更に広げることにつながると考えられる。

2　他児の対象児への関わりについて（表２）

他児の対象児に対する関わりの分析では、C1 に対する関わりは、現在のところ接近や注意喚起など一過的なものが多く、一方 C2 に対する関わりは平行あそびや連合遊びなど時間や場を共有するような関わりが行われていることが明らかとなった。また、食事場面など自由遊び以外の場面を中心に他児が C2 の活動の補助をするような行動がみられた。

併せて、他児は対象児に直接的に関わることが多いが、場面によっては周囲の他者を介して間接的な関わりをもつことが明らかになった。間接的な関わりは、自分の意思が対象児にうまく伝わらないと判断した時、もしくは自分で直接的支援ができないと判断した時であり、そのような場面において他児は周囲の大人を介して対象児と関わろうとする行動が出ていることが明らかになった。

今後支援者は、C2 と他児との関わりを深め、双方向的なやりとりができるように促すとともに、C1 と他児が自然に関わり、理解を深めていくことができるような場面を多く設定していく必要があるのではないかと推察された。

表１　幼稚園での活動への関わり

上位カテゴリー	下位カテゴリー	C1		C2	
		単独	支援者	単独	支援者
孤立的行動	孤立行動	○			
	単独行動			○	●
	単独遊び			○	
傍観的行動	傍観行動				●
	注目・対物				●
	注目・人・現象			○	●
平行的行動	平行あそび			○	●
	模倣遊び			○	●
	周辺行動		●	○	
集団的行動	回避行動			○	●
	保育者への受容・同調行動		●	○	●
	他児への受容・同調行動	○		○	●
	接近行動		●	○	●

※「単独」には対象児が一人でいる場面、「支援者」には支援者とともにいる場面のエピソードを分類した。

※単独場面で該当する行動が生起した場合には○を、支援者とともにいる場面で該当する行動が生起した場合には●を入れることとした。

表２　他児の対象児への関わり

上位カテゴリー	下位カテゴリー	C1		C2	
		遊び	外	遊び	外
親和・受容	受容・承認	○		○	
	褒め・励まし			○	●
共有・協同	分与	○		○	
	共用	○			
	連合・協同			○	
接近・要求	接近	○	●		
	注意喚起	○			●
	誘い		●	○	
	補助			◇	
中立	平行あそび			○	
	傍観		●	○	
	その他			○	●
回避・攻撃	拒否		●	○	
	乱暴		●		
	否定			◇	

※「遊び」には自由遊び場面、「外」には自由遊び以外の場面のエピソードを分類した。

※自由遊び場面で該当する行動が生起した場合には○を、自由遊び場面外で該当する行動が生起した場合には●を入れることとした。

※◇は間接的な関わりであることを示す。

３　支援者の対象児の幼稚園での活動への関わりについて

エピソードの分析からＮはC1の医療的ケアを行う看護師としての役割を越えて、C1、C2の幼稚園での活動全般を支える支援者としての役割も大きいことが明らかになった。支援者Ｎの担う役割は、情報保障、移動の支援、活動の支援が中心となり、対象児に対して他児の思いを伝えるコミュニケーションの支援は観察場面では生起しなかった。

その一方で、他児に対しては対象児の思いを代弁して伝えたり、Ｎの対象児に対するケアの内容について説明したり、対象児の様子を他児に理解しやすいように伝えるなど他児と対象児をつないだり、対象児への理解を深めるための役割を担っていることが明らかになった。

今後年齢の上昇とともに、子どもたちの人間関係や遊びがより複雑になってくると推測される。その中で対象児の統合保育を支える支援者Ｎや教員の、対象児と他児をつなぐコミュニケーションの支援者としての役割の重要性が更に増大してくると考えられる。

Ⅳ　全体考察

本研究では、対象児の観察とそれらの分析によりＢ幼稚園で展開される統合保育の実際を一部ではあるが明らかにすることができた。

障害の重い子どもは生活上、医療上の規制が多く、幼稚園、保育所での統合保育に至るには困難が多いことが予想される。しかし、生活上、医療上の規制があり、コミュニケーションや活動の参加に困難が多い子どもであるからこそ、統合保育の場で様々な人と関わり、様々な経験を重ねることは、その子どもの生活を充実させるために必要なことではないかと考える。

障害の重い子どもの統合保育について検討していくべき観点は今回取り上げた以外にも複数残されており、それらを総合的に検討していくことが今後の課題として残された。

文献

丸山良平（2009）保育園３歳クラス女児ミホの幼児と保育者とのかかわり．上越教育大学研究紀要，28,65-74.

三宅和夫・若井邦夫・伊藤則博・後藤守・浜名紹代・臼井博・吉村紀子（1974）乳幼児発達研究法の探求 2．評定法による特性把握と相互作用過程分析．北海道大学教育学部紀要，23，1-66.

野田裕子・田中道治（1993）統合保育における精神遅滞幼児と健常幼児の相互作用過程．特殊教育学研究，31(3)，37-43.

奥山清子・花谷香津世・板野美佐子（1993）障害児保育拠点園における障害児の対人関係．川崎医療福祉学会誌，3(2)，69-74.

寺川志奈子（2010）障害児保育．茂木俊彦（編），特別支援教育大辞典．旬報社，409-411.

土谷良巳（2006）重症心身障害児・者のコミュニケーション．発達障害研究．28(4)，238-247.